

博士学位請求論文審査報告書

報告番号 甲 乙 第 号

氏名 工藤 義信

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 博士（文学）	井出 新
	同 文学研究科委員	
副査	慶應義塾大学教授 博士（文学）	徳永 聡子
	同 文学研究科委員	
副査	慶應義塾大学名誉教授 Ph. D	松田 隆美
副査	ケンタッキー大学英文科教授 Ph. D	マシュー・ジャンカルロ (Matthew Giancarlo)
学識確認	慶應義塾大学文学部教授	井出 新
	同 文学研究科委員	

論文題目

Negotiating the Moral: Peter Idley's *Instructions to his Son* and its Scribes and Readers
(教訓をめぐる交渉—ピーター・イドリー作『息子への教え』とその筆耕者および読者たち)

中世後期イングランドで隆盛をみた道徳指南書の代表格とされる、ピーター・イドリー作『息子への教え』は、近年研究が活性化しつつあるが、その原典との綿密な比較分析や現存写本に基づく作品受容に関する研究は未だ少ない。本学位請求論文は、『息子への教え』のテキストとコンテクストの解明と収録写本の多角的な分析から、同作品の成立と受容の過程を具体的に描き出し、15 世紀イングランドにおける道徳指南書の研究に重要となる新知見を示している。

本論文の構成は、以下の通りである。

INTRODUCTION

CHAPTER 1 Quick Learning and Morality as Action and Profits: *Instructions to his Son* as a Conduct Text

CHAPTER 2 The Unique Rearrangements of Book II of *Instructions* in London, British Library, Arundel MS 20

CHAPTER 3 The Book Owner's Self-Identity and Self-Presentation in the Miscellany Manuscripts Known as 'The Fisher Miscellany'

CONCLUSION

【論文概要】

まず序章において著者は、ピーター・イドリー作『息子への教え』を主軸とした、中世後期の道德指南書研究の意義ならびに本論文の手法と道筋を示す。冒頭で中世ヨーロッパにおいて中世文学の成立が多様な主体の営みによるものであることを整理すると、15 世紀イングランドで俗語で書かれた道德指南書を、写本レベルで研究する意義を確認する。中世後期に道德指南書が隆盛した背景として、著者は、14 世紀半ば以降に台頭した中流社会階層が、独自の道德や行動規範を必要としたことが、その編纂と受容を促進した要因であるとし、その一例としてイドリーの『息子への教え』を位置付ける。そして本論文の目的は、『息子への教え』のテキストと写本レベルでの分析から、地主層と市民層の主体的な編纂と受容の営みを検証し、中世後期の文芸文化と社会的背景を明らかにすることであると述べる。序論後半では、先行研究の不足を補いながら、イドリーの伝記的事実の整理と、彼が属した社会階層をより明確に定めた上で、近年の写本研究や地域史研究の成果を基に、作者イドリーの読者層が地主層と都市商人層が中心であったことを示している。

続く第一章は、『息子への教え』をその主要材源として知られているテキストと比較し、内容面および構造面における材源との相違から本作品の特質を明らかにする。そしてその特質が、同時代の道德指南書全般に通ずるものであることから、中世後期イングランドの中流社会階層の行動規範の学び方や道德概念を反映したものであると論じる。具体的には『息子への教え』第一巻を、アルベルターノ・ダ・ブレシアの著作と比較することで、著者は、読書や沈思を道德的涵養の過程として重視した原典に対し、イドリーは、読者が必要な情報を効率良く取り入れ実践できるよう、学びの過程よりも行動規範の習得を意識した翻案を行なったと分析する。続く第二巻についても同様に、イドリーの翻案は、平信徒に告解準備の内省を促すロバート・マニング作『罪を論ず』を主要材源としつつも、名声を保ち俗世での繁栄を目指す生き方と、良きキリスト教徒として救済へ向かう生き方とに矛盾を生じさせていないことが示される。さらにイドリーが、死の予測不可能性と、死の到来までになすべきことを折に触れて強調していることから、『罪を論ず』を、然るべき行動を遅滞なくとるためのリマインダー的テキストへと変容させたと読み解く。さらにこうした変更内容は、中世後期の道德指南書の指向性と全般的に合致していることから、イドリーが想定した読者層に合わせて行った翻案であることを指摘する。

第二章は、『息子への教え』の現存写本の中で、筆耕者の営みを最も顕著に反映する事例として、同作品の第二巻を収録した大英図書館所蔵 Arundel MS 20 の改変に焦点を当てる。他の写本との比較から、当該写本内のパッセージの削除や順序変更が、写本制作時に生じた可能性が高い理由を示した上で、これらの改変に見られる共通点から、編集の意図について考察を加えている。この写本では、教会聖職者を批判する言説や聖職者が諷刺的

に描かれた例話の削除に加え、異端信仰や反逆といった、同時代イングランドの社会問題を想起させる議論が簡略化されている。また改変を経て選定された例話の多くが、死者の霊が生者に助言するという共通のパターンを持ち、そのまま読者が実践に移すべき内容で教訓の伝達構造が単純化している。その一方、例話の寓意的・比喩的な側面は削がれ、イドリー原著が有した、15世紀の社会状況に警告を与える挑戦的な要素は大幅に減じられている。全体として、意図しない含意を避け、多様な社会集団から成る平信徒の聴き手に、教訓の要点が確実に伝わるよう考慮された改変であると指摘する。Arundel 写本に見られるこれらの改変は、異端と内乱によって動揺する15世紀の世相を反映するものであり、編纂者が、同時代の社会状況を遠ざけ、指南書の真髄である教訓の信頼性の保持に努めた姿勢の現れであると著者は論じる。そして章末において、第二章で分析した編纂と改変は、写本筆耕者リチャード・イングリッシュの手によるものであると結論付けている。

第三章は、写本の所有者が独自の形態と文脈において『息子への教え』を受容する様相が顕著な形で見出される事例として、ケンブリッジ大学モードリン・コレッジ所蔵 Pepys MS 2030 とそのペア写本とされるケンブリッジ大学図書館所蔵 MS Ee.2.15 を取り上げる。両写本は、チョーサー、ガワー、リドゲイトなどの文学作品も収録した「ミセラニー写本」である。写本の所有者を表す商業者マークが、装飾イニシャルに組み込まれていることや、同じ商業者マークが地方都市ノリッジに位置した建物に刻まれていたこと、またその土地所有に関する新たな証拠などから、著者は、写本制作依頼者フィッシャーがノリッジに拠点を置く商人で、市政を司るエリート集団外の商人だったとする仮説を提起する。さらには貴族の紋章との類似性から、写本の商業者マークはフィッシャーの上昇志向を示し、写本を自身を象徴する所有物として捉えていた可能性を指摘し、その収録テキストの選択に、写本依頼者の自己表出を読み解いていく。すなわち二つのミセラニー写本の収録作品には、制作依頼主である商人フィッシャーが思い描く自己理解と自己提示、社会的上昇志向や文化的主体としての営為が表出し、とりわけ地主層に相応しい振る舞いを説く『息子への教え』に最も顕著に表れていると論ずる。このように第三章は、ミセラニー写本のマテリアリティとコンテクストの分析を通じて、商人読者の作品選択にその社会的アイデンティティの形成を読み解いている。

以上のように、本論文は『息子への教え』という中英語の道德指南書を、作者イドリー、写本の筆耕者、写本制作の依頼主という三つの側面から詳細に分析することで、15世紀イングランドの地主層および都市市民層が、それぞれに希求する道德指南書を自身の社会階層に即して編み出したこと、また作品変容を許容する写本文化の中で、作者イドリーのみならず、筆耕者や読者も主体的にテキストに介入し、教訓文学の受容において一端を担っていたことを、作品と現存写本の仔細な分析から具体性を持って論じている。

【審査要旨】

2024 年 12 月 13 日に三田キャンパスで対面と Zoom のハイフレックス方式で実施された口頭試問の質疑応答の内容を踏まえて、審査委員会の所見を以下に要約する。

本論文は、ピーター・イドリーの『息子への教え』について、そのテキストと現存写本の仔細な分析結果を、同時代の歴史的および社会的な文脈の中に位置付けて論じることで、同作品の主要読者層が、作者イドリーと同じ社会階層の地主層や都市市民層であること、またそうした階層の読者たちが写本制作にも積極的に関与し、自らの社会的アイデンティティの形成を図った諸相を説得力をもって論じている。中世後期イングランドの道德指南書研究に独創的で重要な基盤を提供するきわめて優れた学術論文であり、イドリー研究だけでなく、中世文学全般に研究の新たな方向性を示すものとして高く評価できる。

本論文を構成する各章にはそれぞれに次に述べるような重要な学術的貢献が認められる。

最初に特筆すべきは、序章が単なる導入部にとどまらず、本論に相当する充実した議論を展開している点である。特に、イドリーの官僚としての経歴や文学的背景に関して、先行研究を批判的に検証し、新たな証拠と解釈を提示した、非常に説得力のある論となっており、本論として独立させるに値する。また写本に存する証拠と近年のオックスフォードシャー地域史研究の知見から、『息子への教え』の現存写本の一つ、大英図書館所蔵 Arundel MS 20 の筆耕者が、オックスフォードシャーの地主リチャード・イングリッシュであり、イドリーと同じ社会階層に属した人物である可能性を導き出した学術的功績は大きい。筆耕者イングリッシュや具体的な地名の同定、15 世紀の読者層をめぐる序章における著者の考察は、本論文の議論の基礎を築くものである。また『息子への教え』をめぐる文芸環境の理解にもきわめて有用で、同書の読者ネットワークについて新たな視座を呈している。

続く第一章では、イドリーの詩作が主要原典の翻訳にとどまらず、彼の道德観と実用性を付与しながらの翻案であることを、テキスト分析と同時代の社会および歴史的な文脈から解釈し、独創的な視点から『息子への教え』を再評価している。従来の研究では、イドリーの詩は、アルベルターノ・ダ・ブレシアの忠実な翻案作品と評されることが多かったが、著者はこれに異を唱え、冷静かつ適切な視点からその本質に迫っている。道德の学びを個人の内面的成長として捉えるアルベルターノに対し、イドリーは、良好な人間関係を築くために必要な振る舞いの体得として捉えていることを、緻密なテキスト分析を重ねるなかで鋭く指摘する。イドリーが平信徒読者に内省を促すマニングの『罪を論ず』を用いながらも、そこでの教えを名声を得るための世俗的な教訓へと転換させたことや、彼が加えた大幅なテキスト改変は同時代の社会的要請に応じたもので、読書を通じて迅速かつ効率的に教訓を習得できるよう意図されているとした考察は秀逸で、同作品に新たな解釈の可能性を開く。本章は若干の修正を加えた上で、出版を検討するにふさわしい。

第二章は、中世研究を牽引する査読付き国際学術誌に掲載され、イドリー研究者から高い評価を得た論考を基にしている。著者は、大英図書館所蔵 Additional MS 57335 と Arundel MS 20 の本文を丹念に比較分析し、テキストの異同から写本編纂の意図をあぶり出している。たとえば著者は古写本学的考察から、Arundel 写本の編纂者が神聖冒瀆の部を重視していたことを看破し、そのことは 15 世紀の宗教政治的世相や聖職者の政治的・教化的権威を保持するための編集意図を反映するという独創的な見解を披露している。

第三章もまた、中世から初期近代ヨーロッパ書物史研究の分野で重要な国際学術誌に掲載された内容に基づく。イドリー作品を収録する二つのミセラニー写本を取り上げ、制作依頼者とイドリー作品の受容の実際について、同時代の社会的背景の徹底した調査を基に、説得力を持って論じている。とりわけ商業者マークに関する多角的な考察は、写本制作の依頼主の社会階級の理解を深めるものである。またミセラニー写本に収録された各作品が持つ階級に関するイデオロギーに着目した分析は説得力がある。特に「忍耐」や「謙虚さ」といった実践的な美德は、中世後期に商人向けに著された行動指針にも見出される価値観であることもここに付言しておく。

以上のように、本論文は多くの新しい知見を呈するきわめて優れた学術論文である。ただし今後さらに研究を発展させる上で、取り組むべき課題や再考すべき点についての指摘もいくつかなされた。

たとえば第一章で論じた、イドリー作品とアルベルターノの著作との相違点や、15 世紀の詩人ジョン・リドゲイトの作品との重なりはさらなる考察が可能であり、そこからイドリーが想定した読者層について議論を深化させることが期待される。また第二章で論じられている、聖職者批判に関する削除についての議論は再考の余地がある。著者は、この部分の欠如は、編纂者が聖職者の権威を損いいう言説を取り除いた、積極的なテキスト介入であるとの見解を示しているが、当該写本に非常に多くの欠葉があるため検証は不可能で、底本自体に該当箇所がなかった可能性も否めない。

また三章で提示された装飾文字に関する記述は、装飾写本の専門的な知見からの再検討が望ましい。著者は、イニシャルは素人が書き入れたとしているが、おそらく専門の職人の手によるものであろう。写本の装飾画家についても考察を加えることで、近年研究が進んでいる 15 世紀末の書物生産者たちのネットワークの中に、イドリー写本を位置付ける考察も可能であろう。

加えて「道徳指南書」というジャンルの定義や文学史的な考察も重要であろう。近年、イドリーの『息子への忠告』がシェイクスピア作品と関連付けて論じられたことから推察されるように、その伝統を中世から初期近代へと時間軸を広げて概観し、文学史的な位置付けを検討することは大きな意味を持つ。ただし著者も詳述するように、『息子への忠告』

は複数の異なるジャンルの作品を原典としており、安易な分類を許容するものではない。だがそれゆえにこそ、道德指南書を文学伝統の流れのなかで捉えなおし、イドリー作品の再定位を図ることは意義ある仕事である。

さらに著者が論述する社会階級の区別や社会的地位によるイデオロギーの相違についてもさらなる考察の余地がある。著者は、『息子への教え』の主要読者層は地主層や都市市民層で、作品はそうした社会階層が求める行動規範や処世訓を反映させた作品と論ずる。ここで述べられている行動規範とは、名声や世俗の繁栄を保ち、外面的な行動と物質的、経済的、社会的利益を重視することである。たしかに対象の時代では、異なる社会階層ごとに、独自の生活スタイルを有したことは想像に難くないが、その一方で、都市生活で求められた行動規範や人生訓が階級ごとにどれほど異なっていたのかは再考の余地がある。とりわけ初期近代以降では、社交の中心地として発展した都市において必要とされたのは、まさに富と繁栄の獲得を目指す利益重視の行動規範であった。その意味において、『息子への教え』が示す行動規範は、特定の社会階級に限定されず、より幅広い社会階層の需要に合致した可能性もあり、今後の検討が期待される。

なお最後に書式等の修正点についての指摘もあったが、いずれも軽微で論旨を損なうものではない。

以上、改善点や今後の課題についての指摘もいくつかなされたが、これらは本論文の独創性や学術的意義を損なうものではない。むしろ著者が今後研究をさらに発展させていく上で重要な指針となりうるものである。独創的かつ堅実な調査・研究手法と緻密な論証に基づく本論文は、中世英文学研究へ重要な貢献をなすものであり、審査員一同、工藤義信君の博士号請求論文が博士号（文学）を授与するに相応しいものと判断する。